

ベター・コール・デュオ

Better Call Duo

畑 千絵子 × ステファノ・パラミデッシ

Chieko Hata

Stefano Palamidessi

2024年4月16日 スクエア荏原第2スタジオ／インタビュー：中里精一（編集部）

——ベター・コール・デュオという名前はどのような意味ですか？

畑 千絵子：この名前は『ベター・コール・ソール』（Better Call Saul）というアメリカのテレビ番組のタイトルから取りました。私たちはウォームアップやエクササイズをしながらテレビ番組を見たり、どのデュオが好きかとかを話したりするんですけど、あるとき Solo Duo というイタリアの有名なギター・デュオの話題になって [※ 註：マテオ・メラ&ロレンツォ・ミケーリ]、"Solo Duo" はイタリア語では「デュオだけ」という意味なんです。冗談で「それなら、デュオと呼んだ方がいいよね！」(It's better to call it duo!) と。それで、テレビ番組にひっかけて「ベター・コール・デュオ」と名付けることにしました。デュオは2人だけれど、分離したものではなくて、一体化したもの、そういう意味も含めています。

ステファノ・パラミデッシ：同じメロディー・ラインなら同じタイプの音を出すということが重要だと思います。デュオを1つの楽器として考えるということですね。

畑：ギターデュオはギターが2本ですから、ヴァイオリンとピアノのデュオとは違います。私たちは、そのバランスが音楽にどうフィットするかがとても重要だと考えています。音色やダイナミクス、フレーズなど、細かいところまでこだわりたいんです。

——いつからデュオ活動を始めたのですか？

パラミデッシ：2022年12月からです。ベター・コール・デュオという名前を決めたのは、最初のデュオ・コンサートのためでした。コンサートを開催するにあたってウェブサイトを開設することにしたのですが、正式なデュオなら正式な名前が必要だということになって、それなら自分たちが何者であるかというコンセプトを名前に示そうということになりました。それに私たちは楽しいことが好きですから、この名前は我々らしいジョークだなとも思ったんです。

畑：「ステファノ & チエコ」とか、そういう名前じゃなくてね。

——ギターデュオには夫婦、師弟、友人など、いろいろな人間関係で成り立つケースがありますね。あなた方は

師弟だったわけですが、現在のプロ活動を行なう上では二人はどのような関係ですか？

畑：そう、私は彼の生徒でしたが、デュオとしての私たちは同僚です。もし、私が彼のことを先生だからと遠慮して自分の意見を言えないとしたら、デュオとしては成立しないと思います。その一方で、彼が先生であることはとても便利であることも事実で、私が何か悩んでいるのを見れば、彼はどうすれば良いかを提案してくれます。それはお互いに助け合い、交換し合えるような素敵な世界で、理想を言えば、誰とでもこのような関係を築き、成長できるようにしたいものです。でも、これは私の意見です。

——パラミデッシさんは先生として、この点についていかがですか？

パラミデッシ：千絵子が私の生徒だった頃、私は彼女の、型にはまらない独自のやり方で楽器を歌わせる能力を高く評価していました。ほとんど即興的な感性で、彼女は音楽のフレーズを表現豊かにし、常に興味深いものにします。デュオで演奏する場合、多くの音楽的選択を合理的に行ない、深く研究しなければなりません。しかし、特に独創的な作品においては、常に千絵子の感性と個性が光ります。私の感性は、どちらかというと常識的なんです。これが、私が千絵子と演奏する最大の理由です。それとは別に、彼女は10年ほど私の生徒だったこともあり、音楽的なあらゆる面において素晴らしい理解と共有があることは確かです。

——頻繁に合わせの練習ができる環境なのでしょうか？

畑：ええ、私たちはお互い10分で行き来できるところに住んでいます！そしてローマでは、リハーサルのスケジュールをギリギリまで組むことができるので、とてもラッキーです。

——パラミデッシさんはデュオ以外にもギターアンサンブルで活動されているそうですね。

パラミデッシ：1984年から2005年までコンチェントゥス・ギタートリオ（Concentus Guitar Trio）で活動していました。その後、2006年から現在に至るまで、ギターアン・カルテット（Guitalian Quartet）で演奏しています。



畑 千絵子とステファノ・パラミデッシ

2人の前に置かれた2024年3月号にはパラミデッシが執筆した特集記事『マリオ・ガンジ〜イタリアン・ギターのアイデンティティ』が掲載された。

室内楽が好きなので、ギター以外の楽器と一緒に演奏することも多いです。フルートとヴィオラとギターのトリオ、ヴァイオリン、フルート、歌手、弦楽合奏等とのアンサンブルなどです。

——その中でベター・コール・デュオは本命ですか？

パラミデッシ：はい、ちょうど2年前に始めたばかりで、一生懸命やっているの、今はこれがメインのアンサンブルだと言えます。このデュオを堅固で、面白く、そして美しいものにするためにね。千絵子と私の双方にとってやり甲斐があります。

畑：音楽的に完璧なものを作りたいという願いは同じだから。私たちは音にこだわり、フレーズの作り方にこだわります。だから時間がかかるし、ある意味同じ考え方が必要です。したがって、私たちが演奏するときには、多くの努力と注意が必要なんです。

——今回のコンサート【※註：4月12日／東京・荏原ひらつかホールで開催】には『ミーニングフル・ポップ』（Meaningful Pop）というタイトルがついていますね。これはどういう意味ですか？

畑：これは私たちの新譜CDと同じタイトルなんです。

パラミデッシ：ポピュラー音楽から生まれた音楽が大好きだから。これは我々のコンセプトでもあります。

畑：私たちは民衆の音楽を元にして古典的な作曲家に

よって書かれたものが好きです。アルベニスのようなスペイン作曲家の音楽も、元は民衆的、伝統的なものだと思います。〈エボカシオン〉と〈コルドバ〉がとても好きなので、今回のプログラムに加えました。

パラミデッシ：今回のプログラムには入れませんでした。ソルの〈幻想曲 Op.54bis〉などは最後にボレロのようなポピュラーな要素が出てきます。今回のプログラムでは最初に藤井真吾さんの《ラプソディー・ジャパン》、最後にガンジの《イタリア組曲》を置いて、自分たちの文化や祖国、日本とイタリアを表現しました。

——藤井さんの《ラプソディー・ジャパン》はどこで見つけたのですか？

畑：以前、村治佳織さんと奏一さんがCDにこの曲を収録されましたが、それを聴いて、これは良いと思ったんです。楽譜を見て、これは基本的に私たちに合う作品だと思いました。

——畑さんはイタリア生まれでイタリア育ちですよね。組曲の中の日本の曲は知っていましたか？

畑：ええ、母（畑 美枝子）がソプラノ歌手ですから、よく私がギター伴奏をして母が日本の歌を歌いました。昔、親子でコンサートをやったこともあります。〈浜辺の歌〉〈雪の降る街を〉〈とおりゃんせ〉とか。でも〈花〉は知らなかったし、〈故郷〉もとても有名な曲だそうですが

畑 千絵子

Chieko Hata

イタリア生まれ。幼い頃からギタリストの父、畑 研二郎（1951-1990）の下でギターを学び始めた。チェゼーナ音楽院でステファノ・パラミデッシに師事。2007年、米国イェール大学音楽学部に入學、ベンジャミン・ヴァーデリーに師事。数々の国際コンクールでファイナリストに残り、国際ギターコンクール・ニコラ・ファーゴで第2位を受賞。ペート・ダベザック、ナルシソ・イエベス、デイヴィッド・ラッセル、カルロ・マルキオーネ、アルベルト・ボンセラのマスタークラスを受講。現在はソリストおよび指導者としてローマに居住し、師パラミデッシとギターデュオ Better Call Duo を組み活動中。2023年には Lumi Edizioni Musical から CD 『A Journey Through Valses』 をリリース。2024年にはベター・コール・デュオとしてダヴィンチ・クラシクスから『Meaningful Pop』をリリース。

Better Call Duo ウェブサイト

<https://www.bettercallduo.com/>



知らなかったです。

——ギター伴奏はあなたが編曲して？

畑：ギタリストだった父（畑 研二郎）が編曲するのが好きでしたので、母と一緒に演奏していた楽譜はすべて父の編曲です。

——この《ラブソディー・ジャパン》はとても良い選曲ですね。

畑：そうですね。テーマもとても良いし、自分たちの表現を探すのがとても楽しかった。私はステファノにすべての曲を説明し、それぞれの曲の違うヴァージョンも探しました。例えば、子供たちの合唱で〈ずいずいずいころばし〉とか〈花〉を歌っているものなど。

パラミデッシ：それはとても参考になりました。藤井さんの楽譜はすごく指示が細かいんですよ。だから、彼が書いたことを僕らもなるべく忠実に再現するよう努めました。そして僕たちなりの音楽も感じられるように。

——藤井眞吾さんは先日のコンサートにお見えになっていましたね。東京まで聴きに來られたことに驚きました。

畑：1年前、自宅でウェブサイト用に最初の演奏ビデオを撮ったときに、この曲を弾いて本当に楽しかったんです。藤井眞吾さんに《ラブソディー・ジャパン》を動画にしましたよとメールを差し上げたら、返信をくださって、「とても嬉しい」と言ってくださいました。それで東京でのコンサートにご招待したんです。でも藤井さんは京都の方だから、來られないかもしれないと思っていたのですが、嬉しいことになってくださいました。

——私はあなた方の新しいCDをまだ聴いていないのですが、コンサートと同じ曲目なのでしょうか？

畑：いいえ、まったく同じではありません。CDに収録したデュオートの《6つの友情》はコンサート・プログラムには入れませんでした。でも、これは実際、面白い作品ですし、演奏するのがとても楽しいです。それぞれ1～2分の小品集です。

パラミデッシ：そう、全6曲で10分くらいです。

畑：各曲は他の作曲家の作品に触発されて書かれています。そこに私たちもインスパイアされます。ロドリゴの《アランフェス協奏曲》第2楽章のメロディーも入っています。スペインのアランフェスでは、このメロディーが街の鐘によって毎日流れます。だからみんなこのメロディーを知っています。ポピュラーというのは、「誰もが心に思い浮かべられるようなもの」という意味だと思います。そういう意味で、いったん身近になったものは、ポピュラーになるんだと思います。

——次のCDの予定はありますか？

パラミデッシ：次は19世紀の音楽を集めたものにする予定です。我々はソルの音楽が大好きなので、特にソルの二重奏曲集を考えています。

——楽器について教えてください。お二人は同じギターを使っていますか？

パラミデッシ：はい、二人共、ミルコ・ミリオリニ（Mirko Migliorini）が製作したギターを使っています。千絵子には以前はスモールマンを使っていました。

畑：1993年製のスモールマンでしたが、彼のミリオリニの音色と大きなギャップがありました。バランスを取るために常に注意しなければならなかったのが、大変でした。

パラミデッシ：CDの録音だと余計、違いが出るからね。今の2つのギターは同じものだから、とても楽です。

畑：新しいギターはとても気に入っています。二人とも同じ音になるから。

——畑さんのギターは出来立てのようですね。

畑：2ヵ月前に出来たばかりです。早く使いすぎてニスがかびきっていないけれど、まあ大丈夫でしょう（笑）。

パラミデッシ：スモールマンの前はカズオ・サトウを使っていたね。

畑：そう、カズオ・サトウはスプルー・トップで、スモールマンはシダー・トップ。ミリオリニでまた伝統的なスプルーに戻ってきました。



ステファノ・パラミデッシ

Stefano Palamidessi

ローマのサンタ・チェチーリア音楽院でギターと作曲を学び首席で卒業。国内外の数多くのギターコンクールで優勝。20歳からソリスト、オーケストラや著名人との共演など演奏活動を開始。世界の16以上の放送局で演奏や録音を行っている。著作に『ギターのための学習方法論と技術演習 Study methodology and technical exercises for guitar』（1999年）、ブライアン・ジェファリおよびコリン・クーパーと共同でフェルナンド・ソルの研究に関する著作を出版（2000年）。GuitArt誌での指導連載も開始した。ソルの幻想曲全集（プリリアント・クラシックス CD3 枚組）の世界初演録音後、3つの異なる新しいソロおよび室内録音プロジェクトを準備している。モーリス J. サマーフィールド著『The Classical Guitar: its evolution, players and personalities since 1800』にバイオグラフィが掲載されている。イタリア国内外でマスタークラスを開催、リチーニオ・レフィチェ音楽院の学位コースでギターを教えており、ローマ国際音楽アカデミー、市民芸術学校の理事長、ファブリカ・アルモニカ ETS のゼネラルマネージャーも務め、年間120の音楽イベントを主催している。

パラミデッシ：でも、ミリオリーニは両方ともスブルースのダブルトップだね。

——ミルコ・ミリオリーニは若い人ですか？

畑：私と同じ世代だから、若い！

パラミデッシ：40歳代でしょう。彼はイタリア北部の山の中に住んでいます。冬は雪に埋もれているような場所です。

——スモールマンはオーストラリアの山の中に住んでいますね。

パラミデッシ：現在は他に移ったようです。スモールマンは良い楽器ですが独奏向きのギターだと思います。アンサンブルで使うと、何か失われるような……。

畑：自己主張が強く、鳴り過ぎる感じ。

——ガンジの《イタリア組曲》についてお聞かせください。私はこの組曲を知らなかったのですが、3楽章構成なんですか？

パラミデッシ：3つの楽章はすべてポピュラーなテーマから来ています。イタリアではとても有名な曲です。特に第2楽章はオリジナルに近い。でも第1楽章はそうではない。テーマは出発点に過ぎません。ガンジはジャズや南米の音楽に精通していて、彼は作曲においてそれらを取り入れています。不協和音とかね。この組曲では、特にナボリの音階に由来する和声を使っています。

——この作品の楽譜は出版されていますか？

パラミデッシ：はい、イタリアのザニボン社から出しています。この組曲はヒルとウィルチンスキーのデュオ（The Hill-Wiltschinsky Guitar Duo）に捧げられています。

——彼らはイタリア人ですか？

畑：イギリス人です。彼らは非常にヴィルトゥオーゾ的で速く、豪快な演奏でヨーロッパではとても人気があったんですが、20世紀の終わり頃に活動を辞めてしまいました。なぜか分かりませんが。

——爪の形もお二人は似ている？

畑：私の爪はとても弱いんです。例えば、コンサート・

プログラムの後半にガンジの曲があった場合、それは自分の爪で弾きたいので、前半はプラスチックの付け爪を使います。前半で爪が無くなってしまうと困りますので。それと私は昔、タバコを吸っていたんですが、爪が弱くなってきたので止めたら、爪が少し強くなりました。

パラミデッシ：私も実は最近爪が弱くなって、ステージでは付け爪を使っています。今はいろいろな爪グッズがありますが、若い時の自分の爪に勝るものはないですね。

——弦も同じ物を使っていますか？

畑：はい、サバレスのアリアンス・カンティーガです。②弦と③弦はカーボンです。このタイプの弦がとても好きです。太い弦はあまり好きではありません。

ベター・コール・デュオ／ミーニングフル・ポップ



[収録曲]

コム・デ・グランドウ（ディアンズ）

トッカータ（プティ）

ラプソディー・ジャパン（藤井眞吾）

イタリア組曲（ガンジ）

6つの友情（デュアート）

Da Vinci Classics C00844 日本／イタリア盤